
ヘタレ勇者と意地っ張り魔王ちゃんで大魔王を叩き潰せ！！

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタレ勇者と意地っ張り魔王ちゃんで大魔王を叩き潰せ！！

【Nコード】

N2570X

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

私は、魔王のなかでも落ちこぼれで、ある日他の性格が悪い魔王に襲撃を受け、重傷を負う。助けてくれたのは、魔物と戦うのが恐いらしいヘタレ勇者ソンドだった。いや、もう何でこんな変なに助けられたのか不明だバカ。助けてもらったら、お礼をしなさいは母上の言いつけなので共に大魔王復活を阻止することにした。あれ？ 魔王が大魔王復活を阻止ってかなりおかしくないか！？ じいじい口調の美人魔道師にどこでも裸になれる幼女(?)に剣士のクセに鞭で戦う胸が大きいだけが取り得のニート少女。聖人と魔人の

ハーフの変人皇子。こんな変なメンバーで大魔王復活を阻止できるのか！？ なんだらうっ……このメンバーなら私一人でもやれる気が……。

プロローグ

【プロローグ】

はるか昔、この世界を支配すべく君臨した大魔王は勇者により倒され、世界には平和が訪れたかのように思われた。けれど、そうではなかった。大魔王の血を引く魔王達が数多く存在し、人々を苦しめている。魔王達の目的は、自分達の先祖である大魔王の復活。《闇鳴りのオーブ》と呼ばれる大魔王が眠っているとされるオーブに数え切れない程の魂を捧げ、力を蓄えさせ、やがては復活へと導くらしい。私もその魔王の一人だったが、落ちこぼれの魔王だ。魔法もまともに使えなければ、他の魔王達よりはるかに弱い紛れもない落ちこぼれ。その上に、多民族に親しい者もいて他の魔王からは完全に見下され、邪魔者扱いを受けている。

「アンタ、魔王のクセにそんなに弱いんじゃない、恥さらしだわ。ここで死んだ方がいいんじゃない？」

漆黒に包まれ、ダイヤモンドのような星達が散りばめられ、淡い月がいつそう際立って輝く空の下、木々がうつそうと生い茂る山で自分と同じく魔王である女と対峙していた。紅蓮の如く紅いロングヘアに見えていて不快になるようなドクロの飾りをジャラジャラとぶら下げた漆黒のローブ。そして、醜く歪んだ笑みは見る者を恐怖に陥れる。女は、血のように真っ赤な鎌を振り上げ、疾走。それを防ぐべく、蒼い刀身を持つ刀。水魔刀すいまごうを抜き放ち、受身の態勢を取る。女の鎌をはじめ返すが、女は軽やかな動きで地面に着地し、にやりと不気味な笑みを浮かべると鎌を振り下ろし、空間を斬った。空間にできた傷口の向こうには真っ赤な世界が展開していた。

「残念ね。私には、あなたみたいな落ちこぼれと違って魔法があるのよ?」

勝ち誇ったように言い、女は傷口に鎌を差し入れ、ぐつと引き戻す。引き戻された鎌は、紅く龍の如くうねる炎を纏っていた。

「さようなら、落ちこぼれさん?」

女が鎌を振るうと、炎の暴風が襲いかかってくる。魔法が使えない私には、止めることなんかできるわけもなく、身体を焼き尽くしてしまいそうな激しい炎を受けて山を転がり落ちた。ごろごろと転がり続け、不意に何かに受け止められる。

「わつと!」

間違いまく、人の声だった。こんな山に人間。

「うわあああ!? 君、すごい火傷じゃないかあ! どどどつしたの? もしかして、火遊びでもしてたの? ダメだよ、危ないんだから。てか早く手当てえええええ!」

完全に慌てまくった声が耳に入る。どうやら、変な奴に助けられたらしい。

第一記（前書き）

第一記

ふと、目を覚ますと目の前には真っ白な天井が見える。背中にはふわふわした感触があることから、ベッドで寝ていたんだということが分かった。起き上がり、自分の身体を確認した。先程負ったはずの火傷の跡形も残っておらず、痛みも消えている。恐らくは、回復魔法か何かだろう。周囲を見回すと、豪華なテーブルや椅子、クローゼットなどが見える。貴族の家だろうか……。不意にドアが開き、亜麻色の髪にパープルのような紫色の瞳……。そして、緑色の戦士服の少年が姿を現す。それなりに整った顔立ちをしている。

「あ、起きた？ うん、問題なさそうだねー。心配したんだよ」

ほっとした様子で胸を撫で下ろしている。私を助けてくれたのはこの少年なんだろうが、なぜ助けたのかは分からない。人間と魔人は、外見こそ全く区別がつかないが身にまとう雰囲気で大抵はどちらなのか子供でも分かる。当然、この少年にも私が魔人であることが分かっていたはずだ。だからこそ、なぜ助けてくれたのが理解できない。魔人は、人間にとって危険な存在には変わりなく、もし倒れていたからといって助けたとして、いきなり殺されてしまう可能性だつて十分にあり得る。魔人を恐れていないのか、単にそんなことすら知らないバカなのか……。考えるだけでは答えが出て来るはずもなく、単純に尋ねることにした。

「何で……私を助けたんだ？」

「え？」

意味が分からない、という風に首を傾げている。

「私が魔人だつてことぐらい、分かつただろ？ それなのに、何で……？」
「だって、女の子があんな風に痛い思いをしてたら何の種族でも助けるよ」

「お……お、女……！？」

女の子、と言われてうるたえてしまった。今まで、女扱いされたことなんか一度もない。魔人であるのも理由の一つだが、そもそも私は髪が短いし、服装や話し口調からか男だと思われることの方が多。こうして女だと思ってくれる相手は初めてだ。

「俺は、ソンド。人間と夢魔のハーフなんだ」

「わ……わ、私は……セアル……」

何と言うか、さつきから顔が熱い。今にも火が出そうな程で心臓がバクバクと激しく鼓動する。今までの人生において、これだけの動揺を味わったことは一度もない。敵に殺されかけた時よりも、かなり慌ててる。落着け私……。相手は、魔人じゃない。魔人でもない相手に、こんな風にドキドキしたところで、良い事は一つもない。魔人は多民族から謙遜される種族。いくら目の前にいるソンドが何の種族でも大丈夫と言っいていても、魔人である私に対してあまりいい想いは抱いてないだろう。

「セアルか。よろしくね」

にこりと笑顔を浮かべるソンド。それで振動の鼓動がさらに速くなり、うっかり止まってしまうそうになるほどだった。ダメだ、相手は……。

「可愛くて」

「うわああああ!？」
「え? なになに?」

大声を出すと、ソンドはビクツと反応して不思議そうにこちらを見つめてくる。

「可愛いって言うな」

「え? 何で?」

「絶対、言うなよバカあ!」

とりあえず、念を押して再び横になった。今でもこの状態なんだ。面と向かってそんなことを言われてしまったら余計に……。叶わぬ想像をこれ以上膨らませたら、すごく辛くなりそうだから。

「おおう、何じゃ!? 今、大声が聞こえたが……」

慌てた様子で駆け込んで来たのは、亜麻色の髪を腰まで垂らして翡翠色の瞳、紫色の魔道ローブを身に纏った美人。美人は、こちらを見るなり目をキラキラと輝かせる。

「おおー! これは、ワシ好みの美少年ではないか! 栄養補給に頂いてしまってもいいかの?」

少年……この美人は確かに、少女ではなく少年と言った。男に見えるのが普通なんだ。美がつくかどうかはよく知らないが。

「ま、待ってよ姉ちゃん……。初対面の相手を食べちゃうなんてダメだし、セアルは女の子だよ」

「……………」

しばしの沈黙が訪れる。

「ななな何じゃと!? お、女!? ……すまんかったの、セアル殿……」

どこか、がっかりしたような表情で頭を下げられた。……私が女だったのが相当シヨックなんだろうか。私は男だと思われたのが相当シヨックだったが。美人がはっと思いついたように口を開く。

「自己紹介がまだだったの。ワシはソンドの姉でレイアと申す。と言っわけで、よろしゅう」

「あ、ああ……」

「ところで、セアル殿は魔人のようじゃが……この家は勇者の家系なんじゃ」

「勇者……」

いっそう、気分が沈んだ。勇者とは、魔王を倒す者。すごく遠い存在の気がしてならない。魔王と一番相容れない存在は、間違いなく勇者だ。気付けば私は、俯いていた。

「そ、そんな顔しないでよセアル。俺はセアルのこと、悪い奴だなんて思ってにないから!」

「そんなはずは、ない! 私は……」

結局、何も言えずに部屋を飛び出してしまった。

外に出ると、この家は大きな屋敷だったことが分かった。豪家な外観は、まさに貴族の家そのものだ。青と白の鮮やかなグラデーシオンを映す空を見上げた。燦然と輝く太陽の光が眩しくて、目の端

に涙が浮かぶ。背後から足音が聞こえたが、振り返らない。振り返るのが恐かった。

「セアル殿、ソンドはそなたを嫌ってなどいない。むしろその逆じや」

その声はレイアのものだと容易に分かった。私は、彼女の言葉にどうしても頷けなかった。勇者が魔王を嫌ってないはずがない。

「でも……私は、魔王で……」

「では、セアル殿。こちらに寝返ることはできんのかのう？」

予想外の言葉だった。寝返る……。私は、自分を助けてくれたソンドのために何かをしたいとは思った。もし、何か役に立てるのなら。

「どうかの？ ワシとしても、そなたを敵にしておくのは惜しい」「分かった……。その前に、一つだけやる事がある」

もう迷うことはなく、決意した。

第二記

ソンドの家を後にして、魔王達の拠点である黒魔城に訪れた。真っ黒な城で古びた外観は不気味な雰囲気をかもし出していた。黒魔城には扉が存在しない。魔王以外が不正に侵入できない仕組みになっており、魔王しか入ることができない。落ちこぼれとは言え、私も一応は魔王だ。このなかに入らぐらいはできる。壁に手をかざすと、黒い光が周囲を包み込み、何もなかったはずの壁にぽっかりと大きな穴が現れる。迷うことなく足を踏み入れると、ゆっくりと穴が閉じる。真っ暗な廊下は、かろうじて床が見えるだけで非常に視界が悪い。しばらく進むと、大きな扉が姿を現す。金の装飾が施された真っ黒な扉。扉を開くと無駄に広い部屋の中央　黒いテーブルの上……　白い箱のなかに漆黒のオーブが存在していた。大魔王が眠るとされる、闇鳴りのオーブ。これに大勢の魂を捧げると大魔王が復活すると言われている。私がすることは、一つ。オーブを手にする。

「ちよつと!？」

声が聞こえた方へ振り向くと、魔王である女。昨日の夜、私を殺そうとした相手……。

「あんた、何してるの……?　それ、どうするつもり……?」

珍しく焦った表情を浮かべていた。それも、そうだろう。このオーブは魔王達にとって大事な物。隠しても無駄だろうから、正直に答えた。

「持つて行くに決まってるだろ」

「はあ!？　それが何か分かってる!？　大魔王が眠っているオーブ

なのよ!　それがないと大魔王を復活させられな　」

「だからだバカ。私は、復活を阻止する」

「何言ってるのよ!？　早くそれを渡しなさい!」

「渡しわけないだろ」

そう答えた瞬間、部屋を出た。

「待ちなさい！ 許さない！」

廊下を走り続け、外へと出る。それでも、まだ追って来ている。何とかして振り切らないとまずい。実力が向こうが上だ。万が一、戦うことになったら勝ち目はない。とりあえず、隠れやすい森のなかへと走った。木々がうつそうと生い茂り、地面には草花が咲き乱れるなか、正面から吹く風を受けながら進んで行った。一時間ぐらいたっただろうか……。ようやく声も足音も聞こえなくなった。少し休憩するべく木にもたれかかった。多分、大事な物だから絶対に諦めないだろう。今も必死になって探しているはずだから、今森を出てソンドの家に向かうのはまずい。仮にその時、捕まらなくてもつけられてソンドの家を特定されてしまえば、どうなるかは目に見えてる。闇鳴りのオーブを見つめた。黒く輝くオーブは美しくはあがるが、圧倒されるような感覚を覚える。普通の人間なら、これを持つことさえ耐えられないはずだ。

「見つけた」

「……っ！」

声が聞こえた。目の前を見ると漆黒の髪、眼帯で右目を隠し、黒い着物を身にまとう男……。間違はなく、見覚えがあった。この男も、魔王の一人だ。すぐさま、逃げようとはしたが背後から剣で背中を斬りつけられる。その場に倒れてしまったが、何とかオーブは手放さなかった。

「ほら、そのオーブ返せ」

傷口を踏みつけられる。とんでもない激痛が走る。

「うあ……」

「早く」

「う……くっっ！」

痛みで意識が朦朧とする。このまま気を失ってしまえば、オーブは取られてしまうだろう。私だって、恐らく無事では済まない。この状況から、逃げ出す力もない。

「う、うらー！」

どこからか声が響いてくる。完全に震えていて頼りない声。見上げると、ソンドが剣を持って立っていた。身体が震えまくっていて今にも泣き出しそうな表情。

「そ、その子女の子だから、いじめたりしたら……ふ、吹っ飛ばすからね……！」

「……………」

男が足をのける。ソンドが駆け寄って来て心配そうな表情で覗き込んでくる。

「大丈夫、セアル？　じゃ、じゃあ、逃げようか！」

かなりテンパっているらしい。しゃがみ込んで背中を向けて来るからとりあえずその捕まった。ソンドは立ち上がると、白い玉を放り投げる。もくもくと煙がその場を包み込む。その間にソンドは、猛スピードで走る。

「……………逃げ足は速いんだな……………」

ぼつりと、呟いた。あれで、よく振り落とされなかったなと思う。

「うん、早いよー。逃げるのは得意だからね」

「そろそろ……………降ろしてくれないか……………？」

「ダメだよ。怪我してるんだし……………」

そう言われ、降ろしてもらえなかった。正面から吹いてくる風が心地良い。何だか眠くなってきたが、寝てしまうとさらに重くなつて迷惑がかかるわけで……………必死に堪えた。

「何で一人で危ないことしたの？　女の子が一人で……………危ないじゃないか。俺は、恐がりだし頼りにならないけど、一人で行かれるのは怖いよ。このまま帰って来ない気がして……………」

「あ、わ……………悪い……………」

「本当に、君は目が離せないよ」

「な、何だよ。私は子供じゃないんだからな」

第三記

屋敷に戻ると、レイアに回復魔法をかけてもらい傷を治した。とりあえず、私の目的は達することができた。貸してもらっている部屋のベッドに腰掛け、奪って来た闇鳴りのオーブを見つめた。黒い不気味な光を放つオーブ。大魔王が眠っているとはいえ、これに魂を与えなければ何の問題もない。これさえ、他の魔王達に渡さなければ大魔王は復活することができず、世界は平和のまま……と言いたいところだが、奴らは血眼になってこれを探しているのは間違いない。ずっとここでいても、そのうち嗅ぎつけて取り返しに来るだろうから、一つの場所に留まっているのは良くない。そう考え、あつる話をソンドに持ちかけてみることにした。

ソンドの部屋まで向かい、扉をノックする。何度か繰り返したが返事はない。とりあえず、扉を開ける。鍵はかかってなかったようで簡単に開いた。なかへ足を踏み入れると、ゴロゴロベッドに寝転がっているソンドがいた。こちらに気づいたらしく、慌ててベッドから出て立ち上がる。ぎこちない笑顔を浮かべて一言。

「ど、どうしたの？ うん、俺はダラダラしてなんかいないからね……」
「話があるんだが……いいか？」

ダラダラしていない、という言葉には突っ込まずに本題を切り出す。

「お前、勇者なんだよな？」

「うん。一応そう言うことになってるかなあ……」

「なら、旅に出ないか。旅に出て、力をつけて……大魔王の復活を企む魔王達を倒そう」

魔王である私がこんなことを言ってるのは、どこからどう見ても突っ込みどころ満載だが、私の決意は確かだった。他の魔王達を倒し、大魔王の復活を阻止する。今まで自分を見下してきた奴らに復

警したいし、平和のためにも戦いたい。当然、この話を受けてくれると思っていたのだが、予想に反してソンドはブンブンと首を左右に振る。

「俺には無理だよ……。魔王とかすごく強いし、戦いたくない……」

「……………」

「ホントに無理……………」

呟き、ベッドに潜り込んで震え始める始末。

「このヘタレ勇者がああああ！　勇者が勇者の使命を全うしなくてどうするんだ！」

そんな感じに始まり、一時間ぐらい罵倒したがソンドの様子は変わらず、私はため息をついた。そして、踵を返す。ドアノブに手をかけ、振り向く。

「もついい！　じゃあ、私一人でやるからなバカあ！」

「だ、ダメだよ！　女の子一人で……そんな危険なこと……………」

ベッドから出て来て、慌てた様子で止めようとして来る。その様子を見て、戸惑いがちに尋ねてみた。

「じゃ、じゃあ……一緒にやってくれるか……………」

「わ……分かったよ……………うう……………世話が焼ける子だなあ」

「私は子供じゃないからな！」

「けど…………困ったなあ…………。俺、戦うなんて…………どうしたら…………」

戦うのが嫌いな勇者か。勇者と言えば、大魔王を倒す、という認識しかなかった。人々のため、平和のために戦っていたなら、古の勇者も優しい心を持っていたんだろうが　もし、大魔王が存在していなければ戦いなどせずに平凡に生きてたんだろうか。もしかしたら、そういうものなのかもしれない。どうしても戦わなければならぬ理由があるから戦う……。なら、私も簡単にコイツをヘタレだとか罵るわけには……。

「とにかく逃げればいいか」

「ヘタレが……………」

…………いきなりやってしまった。次からは気をつけなければ。そう

思っているとノック音が響く。

「その話……我も乗ろつかのう。まあ、自分で言うのも何じゃが……それなりに自信はあるしの。回復魔法も使えるし、いて邪魔ではないと思うが？」

「あ、いいのか……？」

確かに、回復役がいるのは助かる。それに……人数は多い方が心強い。レイアは攻撃魔法も使えるようだし、ソンドがビビッて戦わない時があっても、うまく凌げるかもしれない。

「うむ。そうと決まれば、早めに行うのがいいの」

「じゃあ、明日で……」

「明日！？いくら何でも早すぎないかな！？」

「しょうがないだろ。いつまでも、同じ所に留まっていたら他の魔王が嗅ぎつけて来て大変だろうし……」

「あれ？セアルって猫耳とふわふわの尻尾生えてるよね。魔人と猫人のハーフ」

「話逸らしても行くからな。猫じゃなくて狼だ。魔人と人狼のハーフ。今まで気づかなかったのか？」

「うん。何かもう、その可愛い顔して目に入ってたよ」

にこつとほわほわした笑顔。普通に言ってるが、私は顔が急激に熱くなってヒートしそうだった。何で平然とそんなと言えるんだ

！？天然なのか！？

「だだだだ誰が、可愛いだバカあ！」

「え？褒めたのに怒るの！？」

「……………」

とにかく準備だ。気を引き締めないと。

第四記

空は心が溶けてしまいそうな程鮮やかなブルーだった。白い綿のような雲がたなびいていて、燦然と輝きを放つ太陽がじりじりと地面を焦がしてしまっているのではないかと思うくらい強く照り付けている。屋敷の前でオーブや薬草などが詰められたカバンを持ってソンド達が出て来るのを待ち構えていた。流石に早く出て来すぎたらしく、彼らが出て来たのは二時間もたってからだ。どうも浮かぬ顔のソンドと楽しそうにしているレイア。

「魔王と戦うのかあ……やだなあ」

「べつに、今すぐ戦うわけじゃないんだ。しばらくは、闇鳴りのオーブを取られないように一箇所に留まらずにうろつろするだけだし

……」

「でも、うろつろしてたって、奴らに捕まらないとは限らないだろ……？ そうなったら、どうするつもりなのかって」

「……………」

正直、そういう事態は全く考えていなかった。確かに、いくらうろつろしていても、出くわす可能性も十分にある。実際のところ、旅をしていればその確立が低くなるというだけで……。何と云えばいいのかわからず、沈黙。対してソンドは呆れたような表情で。

「まさか考えてなかったの？ 全く、そんなにどうするつもりなの？」「

「う……わ、悪い」

ポコンと音が聞こえて、何事かと顔を上げて正面を見るとレイアがソンドを銅で作られ、緑色の蔦もようなものが巻きついた杖でブン殴っていた。

「女をいじめるでない」

「そ、そんなつもりじゃ……。ごめん、セアル。俺もできる限り方法を考えておくから……」

「いや……べつにいいが……」

とりあえず、いじめられたわけではないはずだ。

「ま、まあ……とにかく行くか」

「どこに？」

「……………」

そう言えば、考えていなかった。とりあえず、一つの場所に留まっているのは奴らに嗅ぎ付けられてますいからという理由で旅をするわけだから、明確な行き先なんか存在しない。いよいよ言えば、どこに行ってもいいということだ。

「どこでもいいからな……何か行きたいところはあるか？」

「温泉とかどう？ 混浴がいいなあ」

「いや……一応、力をつけなければいけないわけで……」

「ふむ。では、四人の天鳴りのの子孫を探す、というのはどうかのう？」

「天鳴りの子孫……？」

初めて聞いた言葉だったので意味が分からず、小首を傾げた。

「ああ、天鳴りの子孫と言うのは……かつて勇者と共に大魔王と戦った天鳴りの英雄達の子孫のことじゃよ」

「ん、そんなのいたのか……」

一応、魔王なんだが知らなかった。他の魔王達もそれに関しては何も言っただけじゃ……勇者以外は脅威ではないという認識からか？ でも、そうやって油断しているなら、いいかもしれない。勇者にだけ警戒しているなら、他の英雄に対しては対策を考えていない可能性もある。もし、そうだったら有利になるだろうし。あれこれ考えていると、ソンドが不満そうに呟く。

「でも、やっぱり……戦うのはやだよ。恐いし……それに……」

「恐い、以外にも何か理由があるんだろうか？ あるとしたら、一体どんなものなんだろう。あまり聞かない方がいいんだろうか。」

「まあ、天鳴りの子孫を探すのは決まったとして、どこにいるんだ

？」

「それなんじゃが セラゼウ山を越えた先のセラヴという町に一人、いるとかいないとか……」

「何だ、曖昧だな……。でも、一応行ってみた方がいいか。それ以外には、全く情報はないんだろ？」

「うむ」

「もう俺やだよ……」

「ソンド、天鳴りの子孫というのは」

「なに……？」

「美少女だそうじゃ」

「え？ 嘘？ 本当に!？」

美少女、という言葉が飛び出した瞬間、今まで暗い表情をしていたのが嘘であるかのように目をキラキラを輝かせて地面に置き去りだった金色で羽の装飾が施された剣を背負う。完全にやる気マックスという感じがにじみ出ている。

「……私と旅するんじゃ、足りないのか……」

「ところで、セアルはやはり尻尾が弱点なのか？」

「……っ!？ いきなり何の話だ!？」

「弱点はると不便であるし、切り落とした方が……」

「いや、恐いこと言わないでくれないか!？」

切り落とすなんて冗談じゃない。そんなことしたら、大変なことになりそうだ。

「ダメだよ姉ちゃん。尻尾はあつた方が可愛いと思うし……」

いや、可愛いとかそういう問題ではない。まさか可愛くなかったら、切り落とすのに賛成するんだろつかコイツは。

「まあ、いいかのう」

「とにかく、行くぞ!」

「俺、セアルの尻尾触ってみたいなって。ふわふわで気持ち良さそう」

「激しく拒否する」

第五記

山は思っていたより険しかった。うつそくと生い茂る木々に大量に咲き乱れる草花。地面には、形も大きさも不揃いな石ころが大量に転がっていて、足場が悪い。木々の間から見える空は赤みを帯びていて、日も沈みかけていた。一日中歩き続けたせいか、流石に疲れて来て足を止めた。

「セアル？」

心配そうな様子でソンドが声をかけてくる。

「少し休もうか？」

「いや……でも、それだと日が沈むまでに下山できないだろ」

まさか自分のせいで、二人に野宿させるわけにはいかない。あんな大きな屋敷で生活していたわけで、到底野宿なんて真似はできないだろう。そうとなれば、何も知らないだろうからむしる危険だ。

「構わんよ。野宿してもいいしの」

「え？」

「こんなこともあるうかと、毛布や食料はちゃんと用意しておるからの」

言いながら、大きなバッグをチラチラと見せてくる。意外にも用意ができているらしい。まあ、旅をするなら万が一のことを考えて野宿すらいできた方が嬉しいが。

「じゃあ……休むか」

「うん。俺も休みたかったんだ」

頷きながら、ソンドは切り株に腰掛けていた。……気づかなかつた。全く疲れている様子など顔に出ていなかった。もしかしたら、私に観察力がないだけかもしれないが。レイアがバッグから大きな布を取り出すと地面に敷き、こちらを見て座るように促してくる。せつかくの好意を無下にする理由もなく、座る。

「では、我は食料を探してくるからの」

立ち上がった踵を返そうとするレイアを引き止める。さつきは、
確か食料はあると言っていた。なら、探しに行く必要はないはずだ。
「あるなら、探す必要はないんじゃない……」

「いや、今後もこのようなことがあるやもしれんし、それを考えればその場で食料を入手できるなら、それを食べて残しておくべきじゃ」

「確かに……」

その通りだ。ここまで、こういうことで頭が回るとは一体どういう教育を受けていたのか気になる所だ。正直、貴族とは思えない。レイアを見送ると、ソンドに向き直る。

「そう言えば、親はいるのか？」

屋敷では、見かけなかった。あそこは別荘が何かで親は別の屋敷に住んでるとかだろうか。

「俺が小さい頃に死んじゃったんだって」

少し暗い表情で答える。私も、もう少し考えて発言するべきかもしれない。何でもかんでも聞くのは……誰にでも聞かれたくないことはあるだろうし。ソンドが何かに気づいたらしく、立ち上がったと思うといきなり押し倒される。なぜかは分からなかったが、顔がみるみる熱くなっていく。

「な……お、お前……何を……」

「静かに。何かいる」

足音が聞こえて来た。

「全く、どこ行ったのよ。早くオーブを取り返さなきゃなのに……」
聞き覚えのある声。間違いなく、魔王の女だった。こちらには気づかなかつたらしく、しだいに足音は遠ざかって行き、聞こえなくなつた。

「……そなた等、何をしておるのじゃ？ 山でそういうことをするのは……い、いや……止めるのも悪いのう。我のことは気にせず、
続け」

「違……」

レイアの誤解を解くのに五時間程かかった。

第六記

すっかり日が沈み、暗いなか山の中を歩き回るのは危険だということ、結局野宿をすることになった。空が漆黒に包まれ、静かな森は不気味に思える。ソンドと話をしていたのだが、流石に眠くなったらしくソンドは立ち上がり、少し離れた場所にある寝袋を指さす。

「じゃあ、俺はあっちで寝るから……」

「や……置いて行くなバカあ！」

……やってしまった。ついソンドにしがみついていた。正直に言うと、暗いところが恐かったりする。魔王がそれでは、お笑いのネタになるかもしれないが怖いものは怖い。本当に尻尾が下がりまくっている。

「……しばらく、ここにいろよ」

苦笑いして再び座ると、頭を撫でてきた。何でだろう……？ どうも子供扱いされてる気がしてならない。そんなに子供っぽくはないはずなんだが……。近くにソンドがいると何となく安心できて、恐さも次第に薄まって眠気が襲ってくる。

目を覚ますと、眩しい陽光が降り注いでいて目にじわりと涙が滲む。起き上がると、切り株に腰掛けて剣の手入れを行うソンドの姿が目に入った。こちらに気づくと笑いかけてくる。

「おはよう」

「……おはよう。レイアはどうしたんだ？」

「そこにいるけど……」

指差した方向に視線を移すとレイアの姿が視界に入った。

「セアルも起きたことじゃし、行くかのう」

どうやら私ができるのを待っていたらしい。これからは、もう少し早起きになるように心がけよう。毛布をカバンに詰め込むと立ち上がった。足場の悪い山道を進んで行くと、先頭にいたソンドが足を止める。急だったので、背中にぶつかるといふ事態が発生。

「急に止まるなよ」

「セアル……前……」

急に沈んだ様子で呟き、どういいうわけか私の後ろに隠れる。怪訝に思いながら、正面に目を向ける。山道の中央にいたのは、ドロドロしたゼリーのような巨大な物体。魔物、クラブだった。

「魔物恐いよ……守って」

「黙れ」

少なくとも、それは男のセリフじゃない。女に対して、守ってとは……プライドも何もないのか、コイツは。こう言うところをみると、何で自分がコイツにドキドキするのか理解できない。もしかして、私の趣味も特殊だったりするのかわかるのか？ このまま固まっているわけにもいかず、水魔刀を抜き放つ。クラブの背後に回りこみ一閃するが、ぐにやりという感触で全く斬った感じはしなかった。

「……これは、斬れないのか？」

厄介な相手だ。刃で斬れない魔物もたまにいと聞くが、よりによって出くわすことになるとは。自分の武器は、刀であるし、魔法はまともに使えない。だからと言って、素手で戦えるほど怪力の持ち主でもない。ちらりと、二人の方を見る。ぶるぶる頭を抱えて震えているソンドは論外。そうとなれば……。

「レイア、魔法で攻撃してほしいんだが……」

「何と！？ 我は仲間をいじめる趣味はないぞ！？」

驚いた様子を見せるレイア。どうやら、意味を取り違えているらしい。何でそうなる？ どう考えても、この状況なら魔物を攻撃してほしいと分かるはずなのに。

「私にもいじめられる趣味はない！ このクラブを攻撃しろって言

「つてるんだ！」

「な、なるほど。ただ、呪文の詠唱に少々時間を要するのじゃが…」

「…」
「分かった」

それまで時間を稼ぐしかない。とりあえず、注意を引き付けてレイアに攻撃が及ばないようにする必要がある。詠唱の途中で攻撃なんかされたら当然、集中力が落ちて魔法の威力も下がる。威力が強い方がいいのは間違いないわけで。斬れはしないが、グラブを刀で殴り注意を引き付ける。悔しいのは、私の攻撃でグラブがダメージを受けることは一切ないことだ。レイアの方に注意がいかないようにできる限り、グラブの視界内に入るために近くに立ち続けた。

「あ、セアル危な」

ソンドが慌てた様子で言いかけたので、振り向く。いつの間にかたのか、もう一体のグラブがすぐ後ろまで迫っていた。攻撃を喰らうことは避けられないだろうと、受身の態勢をとったが衝撃はこなかった。代わりに、何かが潰れるような音が響く。グラブの上に、黒い髪を二つに束ね、無駄に露出度の高い可愛らしい闘士服を纏った少女。歳は十三、十四ぐらいだろうか。まだ幼さの残る顔立ちではあつと明るい笑顔を浮かべる。

「討伐完了だね！ えへへ」

「……………」

第七記

「討伐完了だね！ えへへ」

突然現れて、グラブを潰した少女は満面の笑みで握り拳を作る。何者なのかは分からないが、一撃で魔物を倒してしまっただから、それなりの実力者ではあるようだ……。見る限り、武器は何も持っていない上、魔法を使った様子もなかった。ということは、素手で倒したのだろうか？ 服装は、少々デザインが可愛らしい上、露出度が高いが闘士用である。闘士は、素手で戦う者が多いと聞くと、恐らく闘士なのだろう。このまま黙っているわけにもいかず、口を開く。

「お前、誰だ？」

「私？ 私は、リムだよー！」

「……………」

「えーと、闘士で……天鳴りの闘士なんだよ」

「天鳴り……？」

その言葉を聞いて固まった。勇者と共に大魔王に立ち向かったとされている英雄……。このリムは、その天鳴りの英雄の子孫なのか？ 正直、全然そうは見えない。だが、今……魔物を一撃で倒したのを考えるとあながち嘘ではないかもしれない。むしろ、わざわざそんな嘘をつく理由もないだろう。

「私を探してたんでしょ？」

「え……？」

何も言っていないのに。

「うん、そうだよ。一緒に魔王退治をしてほしいんだ」

答えたのはソンドだった。さつきまで、ぶるぶる震えていたのに今はもうすっかり笑顔になっていた。魔物さえいなければ、いつもこうなんだな。

「いいよー。おばあちゃんに、勇者様が来たらついて行くなさいっ

て言われてるから」

「そうなんだ。君みたいな可愛い子がついて来てくれるなら嬉しいな」

「……………」

「セアル？ どうしたのじゃ？ せっかく天鳴りの子孫が見つかったというのに浮かない表情じゃが……………」

確かに、リムは可愛いかもしれぬ。少々幼い気がしないでもないが……………」

「セアル？」

「いや……………まあ……………可愛い女の子がついて来て、アイツのやる気が上がるなら……………それは、それでいいが……………」

「なるほど」

なぜかレイアは笑顔を浮かべる。リムが仲間に入ることですンドのやる気が上がると納得したのだろうか。確かに、やる気が上がるのは喜ばしいことだろうが、だからと言ってあのビビリが急に魔物に立ち向かうようには思えない。

「セアルは、ヤキモチを焼いておるのじゃな」

「は……………？」

ヤキモチ、だと……………？ この私が……………ヤキモチなんて嘘だ。そんなわけはない。あんなビビリに執着するような奴では……………。とにかく否定だ。恋する乙女じゃないんだぞ私は！

「そ、そんなわけないだろう！ 誰があんなビビリ……………」

「ツンデレもいいが……………ツンはほどほどにした方が良さぞ。報われんからのう。デレを強めにするのをオススメじゃ」

「違っって言ってるだろ！」

「素直じゃないのう」

「つつつづるさいっ！」

「ねえねえ」

そんなやりとりをしていると、リムが着物の裾を引っ張ってくる。「セラヴの町に着いたら、私の家に寄って行こうよー。宿屋と違っ

「てお金もいらないしねー！」

「そうだな……」

確かに、宿屋と違って泊まるのも食事も無料なのはありがたい。そうポンポン進めるわけでもないから、数日は滞在する可能性があるし、それはありがたい。

「そうだ、町に着いたら、何か欲しい物はあるか？ 武器とか道具とか……」

全員に向けて問うた。何か必要な物があれば、町で買い揃えておくにこしたことはない。町を出れば、入手が困難な物が多い。一応今のうちに聞いておいて町に着いたら計画的に。

「俺は、ショーツが欲しいかな」

ソンドは笑顔で言い放つ。

「……それは」

「脱ぎたてホヤホヤで」

「ね？」

言いながら、こちらに目配せしてくる。つまり、コイツが言いたいのは……。

「それは……私に脱げって言うのか？」

「うん。そしたら、頑張つて魔物とも戦えるかもしれない。一番弱い限定で」

「黙れ役立たず。それだけのものを手に入れて、一番弱いのだと？」

「あ、じゃあじゃあ、私のあげるよー！」

嬉しそうに手をあげたかと思うと、その場で迷いもしないどころか恥ずかしがる様子も一切見せずにスカートを上げると、ショーツに手をかける。まさか、本気で脱ぐ気なのか！？ それはまずい。止めなければ……。急いでリムを取り押さえる。

「ダメだダメだ！」

「えー！」

不満そうにほっぺを膨らませて、こちらを見てくる。

「セアルは、自分のショーツをもらってほしいんじゃない？」

「黙れ！ 私はお前らと違って変態じゃない！」

「今日は諦めるよ……」

シヨンボリした様子で呟くソンド。できれば、今日だけじゃなく永遠に諦めてほしい。

第八記

山を下山した頃には、日が一番高いところまで登り、早朝より強く太陽の光が照り付けていた。まるで身体を焼かれるのではと思うほどだ。セラヴの町は山を降りたすぐ先にあるらしく、到着するのに時間はかからなかった。足を踏み入れると、店や民家が立ち並んでいる。小さめの町だが、それなりの賑わいを見せていた。

「あおさ、セアル……顔色悪くない？」

ソンドに指摘される。山道を歩いたせいか、疲れたのは確かだが……顔に出ていたようだ。顔には出さないようにと思っっているつもりだが、どうやらうまく隠すことができず、すぐ顔に出るらしい。ソンドやレイアも同じぐらい歩いているのに疲れた様子は一切なく、自分だけこれでは情けない。

「……気のせいじゃないか？」

「む！？ 疲れてるなら、早く寝た方がいいよ。私の家のベッド貸してあげるから」

「だから、疲れてないと……」

言い終わらないうちに、意識が暗転した。

目を覚ますと、背中にふわふわした感触……ベッドの上だった。

簡素な造りの部屋。状況を理解する。……倒れたのか。一応、私は魔王なんだが……どうしてこうも……。

「目が覚めた？」

声が出た方へ視線を移すと、ソンドが椅子に腰掛けていた。心配そうな表情をしていたが、しばらくたつと苦笑いを浮かべて再び口を開く。

「何か……ごめんね」

「え……？」

意味が分からず、目をぱちくりさせた。

「俺、ビビりで魔物と戦ったりしないから、もしかして無理させてるのかなーって……」

「いや、今日はたまたまだ。魔物相手に戦っても私はあんまり疲れないからな。……と言っても強いわけではないが……」

魔物は、よほど強いものが相手でない限りは容易く倒せる。今日戦ったやつごときで倒れるほど疲れたなんてことはあり得ない。

「そっか。じゃあ、旅とかは初めて？ だから、ちよつと疲れたんじゃないかな？」

確かにその通りかもしれない。戦うことなんかは、よくあったが旅をするのは初めてだ。あんなに歩き回ったことはないし。

「あ、汗かいてるみたいだから着替えた方がいいよ」

「ああ……ところで、何してるんだ？」

どういうわけか、コイツは私の服に手をかけていた。一切、焦ることも迷うこともせずに朗らかな笑顔で告げる。

「着替え、手伝ってあげようと思って」

ちよつと待て。これは、おかしい？ どういうことだ。何でそんなのか理解できない。脱がされないように服を守りつつ尋ねる。

「お前は男で、私は女だぞ？ もしかして、私が男だと勘違いしたのか？」

「してないよ。でも、大丈夫じゃないかな？ だって あ」

上半身の着物を剥ぎ取られたと思うと、ソンドが焦ったような顔をする。とりあえず、上半身に残っているのは胸に巻いているサラシだけだ。羞恥で顔が熱くなり、思わず叫ぶ。

「うわあああああああああ！？」

魔王だから、恥ずかしくもないなんてことはないんだからな。

「どどどうしてくれるんだバカあ！ やめろって言っただろっ!？」
ソンドは顔を赤くしながら、視線を逸らして答える。

「せ、セアルは胸なさそうだから……大丈夫かなって……」

胸が小さかったら大丈夫なんてことはない。コイツの反応は、思ったより大きくてびっくりしたということでもいいんだろつか。ま、まあ、私も人並みにはあるってことだな。……いや、そこは大した問題じゃない。

「お前、何するんだよ！ 婿に行けなくなったら、どうしてくれるんだよお！？」

「セアル、そこはお嫁に、じゃないかな！？ 女の子はお婿には行けないからね。大丈夫だよ、行けなくなったら俺がもらってあげるし」

「え……？ そ、それは……」

決して、嫌いではないし……むしろ気になっているところだが、それは……。何を考えてるんだ私は。とにかく服を着ると、話題を逸らそうと気になっていたことを口に出す。

「そう言えば、魔物と戦いたがらないのは……恐いって以外にも理由があるのか？」

するとソンドは複雑そうな表情を浮かべ、俯いた。滅多に見せることのない表情。……もしかして、聞くべきじゃなかったかもしれない。何らかのトラウマなんかがあるのかもしれない。

「言いたくないなら、言わなくても……」

「俺って、人間と妖魔のハーフだからね……力を発揮するのに必要なものが……。でも、力を発揮するためだけにやっっちゃいけないことだと思っし……」

「？」

「お話ししてるみたいだけど、ちょっといい？」

聞き覚えのある声。部屋の入り口に立っていたのは魔王の女。

第八記（後書き）

タイトルを変更することにしました。

新しいタイトルは「へタレ勇者を強くかつこ良くするため奮闘中の魔王ちゃん」です。変なタイトルですが、よろしく願いします>

<

第九記

「ちよつといい？」

血のように赤い長髪をなびかせる魔王の女は、ゆつくりと歩み寄って来る。ベッドの脇に置いてあった水魔刀に手をかけようとしたが、ソンドに制止される。驚いて見上げると、彼は緊張した面持ちで黄金色の剣　　聖光剣せいこうけんを構えていた。まさか、コイツ戦うつもりなのか？　真意を確かめるため、おずおずと声をかける。

「ソンド、お前……戦うつもりなのか……？」

「だってさ……帰ってくれそうにないし……」

「オーブ返してくれたら帰るわよ？」

「それはちよつと……」

オーブを返したら、本当に帰るかもしれないが、大魔王の復活を阻止するためには何としても渡すわけにはいかない。

「まあ、いいわ。力づくで奪えばいいだけの話だし、それに　勇者様と手合わせしてみたいしね。私の名前はリゼオ。純血の魔人よ。そこの、獣人の血の混じった出来損ないの魔人と違ってね」

勝ち誇ったような笑みを浮かべつつ、こちらを見る。私が見下される理由は、弱いということだけではない。魔人と多種族のハーフは、魔人同士の間生まれられた者より魔人としての力が劣る。

「うっ……魔王と戦うなんて嫌だなあ……」

目の端に涙を浮かべながら聖光剣をリゼオに向けるソンド。完全に恐がっているようで、まともに戦えるとは正直思えなかった。自分が協力しようにも、止められるし、どうしたものか……。あれこれ考えているうちにリゼオが血のように赤い真つ赤な鎌……　血桜狩り《ちざくらかり》を振り上げ、目にも止まらぬ速さで疾走……ソンドに向かって振り下ろす。

「ああああ危なーーーーーーー！？」

咄嗟にその場から飛びのき、床に転がる。何て格好悪い避け方な

んだ。けど、偶然じゃない。ちゃんと攻撃を読んで避けた。全く戦えないわけではない。でなければ、今の一撃で死んでいてもおかしくはない。

「まだよ」

リゼオは、にやりと笑みを浮かべ、床に転がったままのソンドに血桜狩りを振り下ろす。それを聖光剣で受け止めていた。そこまでは良かったのだが、リゼオは足でソンドを蹴り付ける。鈍い音が響き、うずくまっている。まずいな。どうするべきか、考えていた時ふと思いついた。確か、どうにかすれば力を発揮できるとか言っていたはずだ。それが今すぐできることなのかどうかは不明だが、他に何も解決策が思いつかないなら、聞いてみるしかない。

「ソンド、どうやったら力を発揮できるんだ!? 今、やれるならそれを……」

「あ、いや……それは……。今、できないこともないんだけど……いろいろ順序つてものがね……」

歯切れ悪く呟いている。何をそんなに迷っているんだ。今は緊急事態だぞ? 迷っている時間なんかないって言うのに……。

「順序が何だ!? 知るか! 今すぐできるなら早くやれ! このままじゃ死ぬぞ!?!」

「……じゃ、じゃあ、一つだけ聞くとよ。セアルは、俺のこと好き……?」

こんな時に何を言ってるんだと思ったが、答えなければコイツも動かない気がしたから投げやり気味に答える。

「……まあ、嫌いじゃない」

「……そっか。えーと……ホントにごめんね? 一回で、一ヶ月以上は保つだろうし……今日だけ……本当にごめん。こういうのって力を使うためにするものじゃないはずなのに……。うん、その……責任は取るから……」

複雑そうに語るソンドに対して、私は首を傾げる。そうしているうちに、唇に軽く何かが触れた。

「…………っ!？」

何が起こったんだ!? ソンドは床に転がっていた聖光剣を拾い上げる。それは、今まで見たことのないほど、強い光を帯びている。

「ごめんね。ホントにごめんなさい……………」

ソンドは、何度も謝る。確かに、衝撃的なことだったが…………。

「謝ってないで早く戦えっ!」

「うん」

第十記

ソンドが光を放つ聖光剣を勢い良く振るい、リゼオを振り払う。吹っ飛んだがすぐさま体勢を立て直し、血桜狩りで斬撃を繰り返す。素早く避け、剣を高く掲げる。剣がいつそう強い光を放ち大きな衝撃はを起こす。その範囲は大きく、見事にリゼオを吹き飛ばした。

「……っ！」

吹っ飛んだりリゼオは、壁に打ち付けられて倒れこむ。その様子を呆然と見守っていた。正直、信じられない光景で頭にハテナマークが飛び交っている。本当に、これがあのビビリなのか？ 魔物と戦うのが恐いとか言ってたくせに、この強さは……反則だ。相手は魔王だぞ？ まさか、あれだけでここまで強い力を発揮できるとは……思い出すと顔から火が出そうだから深くは考えない。よろよると起き上がったリゼオは焦りの表情を浮かべて、信じられないといった様子で顔を上げる。

「あんだ……なんなのよ……？ 何でそんな」

「そうは言われても……俺にも分かんないし……これでも、内心はビビりまくってるんだからね……」

「今のは……たまたまよ。そうよ、私がこんなビビリ勇者に負けるはずないんだから！」

リゼオはソンドを睨みつけ、立ち上がると血桜狩りで空間を切り裂いた。傷口の向こうには真っ赤な世界が展開。血桜狩りに炎の世界の炎を纏わせる。本気を出した。つまり、本気を出すほどの相手だということだ。血桜狩りが纏った炎は激しく燃え上がり、竜の如くうねる。高く飛び上がり、赤い炎の線を引きながら振り下ろす。

それをソンドは聖光剣で受け止めるが炎の竜は剣をすり抜け、奴の肩に噛み付く。

「あつっ!?!」

流石にまずいかも知れないと思い、ベッドから降りると脇に置いてあった水魔刀を手に取り、竜の頭を斬る。竜はあっけなく消え去る。リゼオが驚いた様子でその光景を見ている時、ソンドが聖光剣でリゼオの身体を斬りつける。

「なっ……!?!」

リゼオの身体から、大量の血が噴出しさらに光が切り裂く。

「な、に……よっ……。このままで済むと思うんじゃない、わよっ……!」

これ以上戦うのは危険だと判断したらしく、リゼオはテレポートを使い、姿を消した。ソンドがここまで強いとは、思ってもみなかった。ソンドの手から剣が滑り落ち、その場に座り込む。

「ああ、やっちゃったな……」

第十一記

「ホントにどうしよう……」

ソンドは部屋の椅子に腰掛け、深刻そうに頭を抱えていた。リゼオが去ってからずっとあの調子だ。流石にあのままにしておくのもどうかと思い、声をかける。

「何をそんなに……」

「何をつて、戦うためにあれはしないって決めてたのに」

「あれつて……」

「……キス」

思い出した途端、顔が熱くなる。そう言えば、そうだった。あの後のソンドの奮闘ぶりですっかり記憶が薄まっていたのだが、改めて思い出すとんでもないことだ。

「ど、どうしよう……?」

「いや……何て言えばいいんだ……?」

どうしようと言われても、どう答えればいいのか全く分からない。……キスをしたから、何をどうしろと……? 分からない。こう言う時の対処法は全くと言っていいほど何も知らない。まあ、ソンドは恋愛的な感情があったわけではなく、リゼルを倒すためにやむを得ず……。その理由では、正直いい気はしないが仕方のないことで。

「ま……まあ、あのリゼルと戦うために仕方なかったんだろ?」

「いや、それで済ませられることじゃないからね!」

何とか話を収めるつもりが、突っ込まれた。どうしたものか……。

「ホントにどうしよう……」

「そんなもの決まっておるじゃろう。セアルをもらってしまえばいいのじゃ」

「もらうって……」

「嫁として」

「いやいや!？」

いくら何でも話が飛躍しすぎじゃないか!? いくら何でもそれはないので、話をどうにか切り上げることにした。

「もうこのことは忘れる! 私も忘れる! これでいいだろ!？」

「セアル……それは……」

ソンドは複雑そうな表情をしていたが、私はそれ以上声をかけることな外へ出た。

透き通った青空の下、私は庭の花を観賞していた。花壇の前にしゃがみ込んで目の前の花をぼーっと見つめていた。

「どうしたの、セーちゃん?」

声が聞こえ、上を見上げるとリムが立っていた。リムは隣にしゃがみ込み、にこつと無邪気な笑みを浮かべる。

「元気出さないと楽しくないよー?」

「……そうだな」

「夢魔は、力を発揮するためにキスとかしなきゃいけないんだよね？でも、それでも……好きでもない人とはしないと思うよ。セーちゃんには、ソンド君が好きでもない人とそういうことできると思っ？」

「いや……」

部屋に戻ると、ソンドが相変わらず複雑そうな表情をしていた。こちらに気づくと立ち上がり、いきなり私の手を取る。真剣な眼差しで言葉を発する。

「さつきは、本当にごめん。責任取るよ。だから、けっこ……」
「落ち着け！」

いや、本当に……とりあえず、落ち着け。

第1-1記

部屋に集まって、話をしていた。話の内容は、どうやって魔王達を倒すか……。大魔王が封印されたオーブを守り切るにはやはり魔王達を倒す必要があり、戦うことは避けられないだろう。私の力は他の魔王達には劣るし、ソンドはやる時はやれるが、あのビビリよいうでいつも戦えるとは限らない。もちろん、全ての魔王に勝てるという保障もないのだ。それならば、何か対策を立てる必要がある。

「女の子とキャツキャウフフしたいなあ……」

「黙れ」

テーブルに突っ伏して、課題に全く関係のない願望を正直に述べたソンドの頭を軽く叩いた。正直なのはいいことだが、いつでも何でも発言していいわけではない。コイツは、真面目に世界を守る気があるのかどうか疑問でならない。

「じゃあ、私とキャツキャウフフするーっ？」

「ごめんね、俺はロリコンじゃないんだ」

「幼女も黙れ」

「はっつ！？」

二人分の攻撃を喰らったリムは、強いダメージを受けたらしく一瞬椅子ごと倒れかけ、何とか体勢を立て直した後、ほっぺをぶくくと膨らませながら睨みつけてきて、子供らしくテーブルをドンドン叩いて怒りを表現する。子供はさっさと寝てると言ってるやうに。

「セアルよ、一つだけオーブを破壊する方法があるのじゃが……」

「オーブを破壊する方法？」

オーブを破壊……大魔王の力は強力でオーブを破壊するなどできないはずだが、もしできるのなら実行するのが一番だろう。オーブを破壊してしまえば、大魔王復活への道は閉ざされる。そうしてしまえば、世界征服が行われる危険は格段に下がる。他の魔王がそれを目論むこともあるかもしれないが、大魔王よりは劣るだろうし、何とか押さえ込むことは可能だ。

「どうやるんだ？」

気になって仕方がないのでレイアに詰め寄った。

「じゃが、その前に」

「何だ？」

「お姉さまと呼んでくれんかのう」

「私に何させる気なんだ！？ いいから、さつさと教える！」

「いいとは……呼んでくれるということじゃな」

「違うからな！？」

「まあ、よかるう。この世界以外に、六つの世界があるのは知っておるな？ その六つの世界にそれぞれの世界に源というものがある。炎、水、風、大地、光、闇の源。この六つの源を集めて魔法を用いるとオーブを破壊できるというのが、古代の勇者が残した情報じゃ」

勇者が残した情報なら、信じていいだろう。

「しかし、どうやって……」

「キャツキャウフフしょーっ」

「他の世界に」

「服脱いでいい？ 暑いよー」

「黙れ露出狂！」

「ひどいよおっ！」

「話の邪魔をするな！」

全く、何で子供ってというのは空気を読まずに人の話を邪魔するんだ。これだから、幼女ってというのは面倒というか……。

「で、他の世界への行き方じゃが、魔王が魔法を使う時、空間を切り裂くじゃろうっ？」

「ああ……ん？ まさか」

「うむ。そのまさかじゃよ。セアルは魔王じゃろう？ 空間を切り裂いてもらって、そこから別世界へと侵入するのじゃ」

「いや、でも私は……」

他の魔王と違って、まともに魔法も使えない。空間を切り裂くことさえできたことがない。

「魔法の基本は己の力を信じることじゃ。セアルは、自分の力を信じていないのではないか？」

「あ」

その通りだった。私は、落ちこぼれだから魔法もまともに使えないはずがないとずっと思い込んでいた。魔法を使おうと試したのは、たったの数回だ。それで、やっぱり自分にはできないと諦めた。それ以上やらなかった。自分の力をか。脇にあった水魔刀を握る。

「大丈夫だよ。セアルなら、いざとなれば素手で空間をはがせるだろうし……まあ、俺は真似したくないけど」

「ケンカ売ってるのか？」

そう言って睨みつけてやると、ソンドはテーブルの下に入り込む

ぶる震え始めた。勝手に人が空間を素手ではがせるとか無茶苦茶なことをでっち上げた拳句に真似したくないとは相当失礼な奴だ。あと、恐がられるのもいい気はしない。

「と、とにかくやるか」

目の前の空間を見据えた。

第1 - 2記

目の前の空間を見据えて水魔刀を構えた。空間を切り裂くことができるだろうか？ 自分の力を信じればいいとは言っても、そう簡単には……。ちらりとレイアの方を見る。

「セアルよ、そなたは本当に自分が他の魔王達に劣ると思っておるのか？」

「……………」

本当は、あんな奴らより弱いはずがないと思ってる。だが、それは自分が奴らに負けたくないってだけで事実でもなく、ただ思っているだけだ。

「そなたが人を見下すような連中に負けると？」

「いや、そんなはずは」

大魔王を復活させようとしてるだけの奴らに負けるはずがない。奴らは、大魔王が復活したらその下につくつもりだろう。だが、私はそんなことはしない。大魔王の下につくなんて、プライドも何もないような奴らとは違う。あんな奴らに負けてたまるか。水魔刀で目の前の空間を切り裂く。空間にヒビが入り、傷口が開く。その向こうに展開していたのは紅い炎の世界。

「も、もしかして入るの？ 俺、待ってていい？」

「行かなくてどうするんだバカあ！」

それにしても、驚きを隠せない。今まで一度だってできなかったことができた。自分の力を信じるだけで、こんなに簡単に魔法が使

えるとは……。一応、魔法は信じるのが全て、とは聞いたことがあるが……。

「とにかく、行くか……」

気を引き締めて足を踏み出した。水魔力でさらに空間を切り裂き、人が通れるほどの大きさの入り口を作った。その入り口をくぐると真っ赤な光に包みこまれた。

目を覚ますと、紅い草ばかりの草原だった。空は真っ赤に染まっ
ていて炎を連想させる。これが、炎の世界か……。全てが赤だった。
遠くに見える山も建物も赤色である。この世界には赤色しか存在し
ていないのではないかと思うほどだ。

「うーん……すごいなあ……」

「すごいねー！　すごく暑いから脱いでいい？」

「どうぞー」

「脱ぐな！　ソンドもどうぞじゃないだろ！？」

服を脱ごうとするリムを制止しつつ、レイアに目を向ける。

「で、リムは……」

「炎を司る 紅炎こうえんの世界。炎が生まれたとされる世界じゃ」

「どう見てもそんな感じだな。どれで、炎の源っていうのは」

「それは、これから探すのじゃ」

レイアはにこりと微笑む。流石に源の場所まで分かっているなんて都合の良いことはないか。自力で探すしかなさそうだ。しかし、

炎の源となれば簡単には手に入れられないだろう。誰にでも行けるようなどころにあるとは思えない。

「源を守っている紅神鳥が存在するらしいのう」
「言っと思った」

そういう大事な物は、必ずと言っていいほど何か番人のようなものに守られている。その番人というのも生半可な強さではないだろうし、油断してしまえば危ないだろう。あと、さらにもう一つ問題がある。源を見つけるまで、この世界でどうするか。正直、この暑さでは野宿は厳しい。

「あの………？」

ふと、背後から声が聞こえた。

第1-3記

「あの……?」

振り向くと一人の少女が立っていた。黒く綺麗に切り揃えられた髪に紅い瞳、袖のない武闘服。もしかして、この世界の住人だろうか? なら、一応人は住んでいるのか? 怪訝そうに首を傾げる少女の様子にはっとして言葉を発する。

「……この世界の住人なのか?」

「その物言いは、あなた方は異世界から来たということによろしいでしょうか? はい、私はこの世界の住人です。レン又と言います」

そう答えてレン又は頭を下げる。見た感じで武闘士っぽいからこういう態度は意外だ。武闘士にもこういうタイプはいるんだな。リムとは大違いだ。……リムも、武闘士らしいとは言いがたいが……。そんなことを考えているとソンドが笑顔で話を持ちかける。

「ね、人が住んでるってことはやっぱり町とかはあるの?」

「はい。……と言っても、この世界には一つだけしかありませんが。異世界から来たというなら、まだ分からないことが多いでしょう。町にいけば、いろいろ分かると思いますが、休む所もあります。良かったら、案内しますが……」

「うん、じゃあお願い。早く涼しいところに行きたいよ」

勝手にソンドが頼んでいるが、問題はない。町へ行くのが一番いいだろう。このまま手がかりも何もないまま炎の源を探すのは無謀すぎるし、この世界に来たばかりで慣れないわけで少し休んだ方がいいだろう。しかし、この世界の住人ということは……この暑くて

真っ赤な風景が当たり前なのか？ とても、これが普通なんて私は考えられない。

レンヌに案内してもらい、辿り着いた 赤庭あかにわの町は思ったよりも大勢の人で賑わっていた。赤色のレンガで造られた建物が立ち並び、中央に噴水がある。流石に噴水の水は青色だったが。とりあえず、レンヌが住んでいるらしい家に入れてもらった。木製の簡素な部屋だった。気になることと言えば外が赤いせいで室内まで弱冠赤みを帯びている気がしてしまうところだろうか……。

「炎の源、ですか……」

「うむ、源じゃ。どこにあるか知っておるかのう？」

「私は知りません。知ってる人は、数えるほどしかいないと思います」

「むー……」

いきなり知ってる人物と会ったら苦労しないが。

「ところでレンヌ殿は、あんな所で何をしていたのじゃ？」

「私は、魔物が町に侵入しないように町の周囲を見回るのが仕事なんです」

「そういつことが」

それでもなければ、あんな所をうろついているはずもないか。とりあえず、何か手がかりになるものを少し探してみようと外へ出た。真っ赤な空の下に存在するこの町はずっと夕方みたいに思える。人通りのない細い道を歩き、周囲を見回した。赤色の山や草原などが目に入る。炎の源となれば、火山なんかにあるんだろうか？

「セアルー」

「……………」

聞き覚えのある声が背後から聞こえる。返事もせず、振り返ることもなく歩き続けた。

「耳遠いの？ 耳だけ老化して……………」

「誰の耳が老化してるんだ！？」

「何だ、聞こえてたんだね」

「老化とか失礼にもほどがあるぞ。…………何の用だ？」

「何の用って、一人で出て行ったら危ないよ」

何の用かと思えば、そんなことか。一人で出て行った程度でうっとおしい。コイツは過保護な親か何かなのか？ いや、それにしてもヘタレすぎるか…………。こんなことでは、一人でのん気に散歩もできないじゃないか。

「一人で外へ出るくらいで何だお前は。さっさと帰れ」

「セアル。俺はさ……………」

ソンドは、いつになく真剣な表情でこちらを見据えてくる。その様子を見て、なぜか何も言えなかった。なぜか私の手を取り…………。

「な…………何をしてるんだバカ！」

思わずうつろたえてしまう。本当に何の話なんだ！？

「俺は…………大事な人達が自分の知らないところで何か危険な目にあったりするの嫌なんだ。姉ちゃんでもリムでも…………。もちろん、

セアルでも。何て言うか……自分の目の届くところに来てくれないと不安でたまらないんだ。いなくなっちゃったらやだなって……。うん、なんか心配しすぎな気もするし、変かもだけど……」

言いながら苦笑いを浮かべる。表も裏もないと簡単に分かるソンドの物言いに、何だか心が温かくなっていく気がした。自分のなかにある、氷の塊を溶かしてくれるような。

「心配しすぎだ。ま、まあ、私だって身の回りには気をつけてるつもりだし、急にいなくなったりしないから安心しろ」

「うん。良かった」

「……………」

勇者というのは、本当に正しい正義そのもののような存在で……魔王の心さえも動かすんだろうか……。そこまですごい強さを持っていると思うと、落ちこぼれで心も弱い自分とは、不釣り合いで手の届かない遠い存在に思えてしまう。私は……どうしたらいいんだろう……。

第1 - 4記

レンヌの家に戻ると、どう炎の源を探るか話し合いをしていた。ここは、一つの世界だ。世界単位で探し物をするとなると、闇雲に探し回すのは、いくら何でも時間がかかりすぎる。何か効率の良い探し方を見つける必要がある。

「火山に飛び込むとかなかな？ 炎の源なんだし、マグマのなかにあるかも！」

「黙れ」

確かに炎の源だから、そういう場所にある可能性も考えられる。しかし、実際にそうだったら手の施しようがない。当然の如く飛び込むなんて真似をしたらどうなるかは……想像したくもない。そんな場所にはないことを祈るしかない。

「ところで、なぜ炎の源を探しているんですか？」

そう質問してきたのはレンヌだった。どういう理由で炎の源を探しているか分からない相手にいろいろ教えるのは流石にあれか……。別に聞かれて困るような理由でもないので素直に理由を告げることにした。私は、バッグの入れていた闇鳴りのオーブを取り出す。

「このオーブに封印されている大魔王が二度と復活できないように源を集めてこれを破壊する」

「……………」

レンヌは驚いたような表情でオーブに見入っていた。

「……大魔王というのは、聞いたことがありますか……このオーブに……？」

「ああ」

「なるほど。分かりました」

「もう信じたのか？」

「わざわざ異世界から来るようなら本当なのでしょう」

まあ、嘘つくために異世界まで行く奴なんていないだろう。そう思っているとレンヌが本棚からペラペラの紙を取り出して差し出してきた。受け取って開いてみると、地形なんかが描かれている。

「これは……」

「この世界の地図です。役に立つかは分かりませんが……」

「いや、これは助かる」

地図があれば、怪しいところに目星をつけることもできるかもしれない。じっと地図を眺めた。

「あ」

ソンドが近づいて来て、地図の中央に描かれている大きな火山を指差す。

「ここが怪しいんじゃないかな？」

「確かにそんな感じもするが……」

いくら何でも分かりやすすぎじゃないか？ いや、でも紅神鳥とかいう強い魔物なら大きな火山を棲み処としているかもしれない。可能性が少しでもあるなら行ってみるべきか。

「……レイアはどう思う？」

「うむ。ワシもそこが怪しいと思うのう」

「そうか……。じゃあ、行ってみるべきだな」

「むー！ 何で私の意見は聞かないの？」

「……………」

「何で黙っちゃうのー!？」

「……………で、どうやって行くんだ？」

「うーん……。レン又は火山のあたりがどうなってるか知ってる？」

ソンドの質問に対してレン又は黙り込む。恐らく知らないのだろう。と言うことは、火山は普通の人間には近づけないようなものな
んだろうか？ だとしたら、入るのに苦労しそうだな。

「あの火山は、入り口がないんです」

「……………入り口がない？」

思わず首を傾げた。入り口はないとは一体どういうことだ？ 火
山に入るための入り口……。？ どこかしら入れる所はあると思うの
だが……。何かあるんだろうか？

「はい、なかに入れる所が一切なくて……………」

「……………それは、困るな。まあ、とりあえず行ってみるか……………」

とにかく行ってみるしかない。火山まで行けば、何か方法が見つ
かる可能性もある。

「ま、あんまり急ぐ必要もないじやろ。今日のところはひとまず
休もうではないか。まだこの世界には不慣れじやろ？」

「……………そうだな」

いきなりは、やめておくべきかもしれない。正直まだこの世界の風景なんかには慣れないし、赤い空を見ているだけで目がチカチカする。

「ねえねえ、お店とか行ってみたいなー」

「はあ？」

「だってここ、炎の世界なんですよ？ 珍しい物あるかもしれないよ？」

「それは、そうかもしれないが……」

「でしょ？ 私、新しい武器とかほしいなーっ」

「お前は素手じゃないのか？」

「グローブとかつけるよ！」

「………まあ、強い武器はあつた方がいいが……」

「俺もお菓子とか食べたいなあ……」

リムとソンドがそう言い続けるのでとりあえず店でも見に行くことにした。

第1-5記

ソンドとリムが駄々をこねるのでレンヌの家を出て町のなかを回ることになった。空は相変わらず赤いままだが、町は人々で賑わっていた。赤いレンガで造られた小さな店の前で足を止めたリムが着物の袖を引っ張ってくる。笑顔で店を指差し明るい声で告げる。

「あそこ見てみたいな！ いいのがありそうだよ！」

「……………あ、あそこか……………？」

ここから見える限り、水着みたいなやつしかないんだが……………？ さっきまでリムがほしいと言っていた武器があるようににはとも見えない。あの水着みたいなやつも防御力はほとんどなさそうだし、見る必要があるのか？

「うん、いいと思うよ」

笑顔でソンドは頷いている。コイツが嬉しそうに許可する理由は……………あえて考えないでおこう。返答に迷っているうちにリムが店へ向かって歩き始めてしまったので仕方なく後を追う。店のなかへ足を踏み入れるとやはり水着のような露出度の高い服ばかりだった。……………もしかして、この世界は暑いからこういう服が人気なんだろうか？ 楽しそうに服を選ぶリム。……………武器はどうするんだ……………？ 服を選ぶリムを制止する。

「待て。服を買うなら、もっと防御力の高いものにするべきだ。そんなんじゃないく、分厚いのを……………。あと、武器を買うんじゃないか？ たのか？」

「えー、だって可愛いし……………」

「見た目で選ぶな」

「セアル、そんな真面目に考えなくても大丈夫だって。俺も可愛い方がいいと思うよ」

「しかし……その露出度では魔物と戦う時、防御が……」

「大丈夫ですよ。ここの服は魔法素材でできていますから、ダメー
ジもある程度軽くしてくれて普通の鎧よりも防御力が高いですよ」

そう言って寄って来たのは、女の店員だ。店では、ある程度の時間商品を見て回っていたら店員が寄って来る。こうなると、買わないと何とも言えない感じに……。ふと、気がつくとリムの姿が消えていた。キョロキョロ周囲を見回したが姿が見えない。

「ソンド、リムはどうした？」

「リムなら試着してくるって」

「着たよー！」

試着室のカーテンが勢い良く開き、リムが出て来た。リムの服装は、ピンク色の可愛い服だった。ただし、前が全開で……なかには何も着てない。どうなってるか詳しくはとも言えない。とりあえず、言いたいことは一つ。

「その服はやめろお！ 大体何だ！？ なかに何か着ろ！ あとブラぐらいつける！」

「えー……。だって暑いよ？」

「暑いとかそういう問題じゃない！」

それにしても、とんでもない格好だ。私なら恥ずかしくて泣きそうだ。いや、泣きそうじゃなくて泣く。確実に……。

「俺もリムの格好、可愛いと思うけど……」

「黙れ変態」

「変態じゃないよ。あんな服が普通なんだよ、この世界では！ほら、セアルもこんなはどう？」

そう言っただけでソンドが薦めてくるのは、やはり無駄に露出度が高い水着並み……いや、それ以上に過激なものだった。もちろん着れるわけがない。

「そんなの着れるか」

「えー……。可愛いと思うんだけど……」

「とにかくダメだからな」

「えー……。セーちゃんも着てみたら？ 可愛いよーっ」

「どっぞどっぞ、お客様」

なぜだろう……？ ソンドとリムに紛れて店員まで薦めてくる。いや、ホントに着れない。一応、私は男物で突っ走ると決めているわけ。冗談ではなく本当に……。

「ね？ これ着てみて。試着だけでいいから。うん、きっと可愛いよ」

「……こ、これ以上は泣くぞバカあ……」

「……あー……えっと、そんなに嫌ならいいよ。うん……。セアルは今のままでも十分可愛いと思うし……」

急にソンドは服を引っ込めた。何とか薦めるのをやめてくれたらしい。弱冠、涙が滲んでいた目をこすりつつリムに声をかける。

「その服は却下だ！ 早く着替えて来い！」

「えー！？」

「とにかく却下！ 異論は認めないからな！」

「むー！」

しかし、ソンドはなぜ急に心変わりしたんだ？

第1 - 6 記

「むー！」

よっぽどあの服が気に入っていたらしいリムが店を出た後もほっぺを膨らませながら怒っている。機嫌が悪いらしくさつきからむーとかうーとか唸ってばかりだ。まともな言葉を喋れと言ってやりたいが余計に機嫌を損ねると面倒なのでやめておく。

「ほら、武器買っただろ？ 武器屋探すぞ」

「むー」

「あの服、買わせてあげたら良かったのにー。セアルはケチだなあ」
「うるさい」

とりあえず目についた武器屋にリムを引っ張り込んだ。主に炎属性の武器が多い。それもそうか……。何せここは、炎の世界なわけ……。一応武器屋に並ぶ武器を見て機嫌が直ったらしいリムは楽しそうに武器を選んでいった。流石に武器は、変な物はないだろう。それにしても、赤色ばかりで目がチカチカする。

「よーし、これにしようっ！」

リムが手に取ったのは、やはり赤色のグローブだった。今度は変なものではなさそうだし、文句を言う理由もない。

「じゃあ、金払ってこい。……払い方分かるのか？」

「分かるよー！ 私、子供じゃないもん！」

「……子供だと思っが……」

眩きながらリムに金袋を手渡した。それを受け取るとリムはカウンターに向かってとてとて走って行く。

「セアルって意外と心配性？」

「誰が心配性だバカ。私は人の心配なんかしない」

「そうなんだ？ 俺にはそうは見えないけど……」

「な、何言ってるんだ！ これでも私は一応魔王だぞ！？」

「そっか。じゃあ、俺とか死にそうになっても助けてくれないの？」

「あ、いや……それは……まあ、助けてやらないことも……」

そう言われてしまうとどうにも……。コイツ、意外と口がうまいのか？ じつと様子を見てしていると笑顔を浮かべる。とりあえず、愛想がいいことは分かった。しかし。

「じゃあ……お前は、私なんか死にそうになったら、魔物と戦ってくれるのか……？」

「……………」

返答がない。普通なら、ここは即答するべきところのはずだが、コイツは黙ったまま。何かを口にする様子もなくふるふると震え始めていた。

「このびりびりが……」

「魔物とは無理だって！」

「じゃ……じゃあ……私のこと、見殺しにするのか……」

「あ、そっだ！ 持って全力で逃げることなら……何とかできるかなって……」

「むう……。どうも納得いかないんだが」

「納得してよ。うん、戦うの無理だし……」

「リゼオとは戦ったじゃないか……」

「……あれは、流れて言うか。もう無理だよ……」

「いや、もう無理じゃないだろ!？」

「買って来たよー」

買ったばかりのグローブを早速手にはめたリムが嬉しそうに駆け寄って来る。

「……そうか。じゃあ、戻って火山に行く準備をするからな」

「はーいっ!」

第1 - 7 記

リムも新しい武器を手に入れたので上機嫌だった。買ったばかりのグローブを手にはめて手をブンブンと振りまわしながら笑顔で鼻歌を歌っている。レンヌの家の一室でテーブルを囲んでいた。まず口を開いたにはレイアだった。

「リムも機嫌が良さそうじゃな」

「うん！ 新しい武器だよ。今まで素手だったから新鮮だよー。あ、でも服買えなかったのは残念だけどねー。むー……」

「だよね。あの服可愛かったのに……」

ソンドも頷いている。何だこの雰囲気は……。まるで私が悪いみたいじゃないか。あんな服、良くないだろうし、正しいのは私なんだからな」

「む？ ソンドまで……どういう服だったのじゃ？」

「こつ……水着みたいなの……露出がヤツホーみたいなの……」

露出がヤツホーってどういう意味だ？

「ふむ、言いたいことは分かったがのう……。リムは今でも十分露出してると思うのだが……ソンドは幼女相手にどこまで求める気なの？」

「……よく考えれば俺はロリコンじゃないね」

何だ？ ソンドのセリフがおかしい気がしてならない。よく考えればって何なんだ？

「むー……私は幼女じゃないよ……大人女だよ！」

「もつと言葉の勉強をしる。大人女って何だ」

「大人の女だよ」

「確かにそうかもしれないが……少なくともお前は大人じゃない」

そう言っでやるとリムは無言でほっぺを膨らませる。暴れないだけマシだが、こちらを睨みつけてくるのはやめてほしい。まあ、無視すればいいだけの話だが。

「で、その話は置いておいてどうやって火山に入るかだが……」

「うーん……入り口がないんだよね？」

ソンドが複雑そうに呟き、確かめるためかレンヌに目配せする。それに対してレンヌは無言で頷いた。

「魔法で穴を開けたりは……」

「できません。試した人がいるんですが、どんなに強力な魔法を使ってもダメだったそうです」

「……………」

魔法で穴を開けられないなら、恐らく武器を使っても無理か。

「とりあえず行くしかないか」

「そうだねー！」

「まあ、行かないことには何も始まんからのう」

「……ところで、地図を見てもよく道が分からないんだが……」
「あ、案内します」

そんなわけで、レンヌに案内を頼むことにした。火山へ向かうべく外へ出ると相変わらず空は赤色だった。

第1 - 8 記

空は相変わらず、夕方かと思ってしまっただけで真つ赤に染まっただけでござつと固い地面を歩いてた。町よりもいっそう暑く、地面からも熱気が伝わってくる。火山の近くはこんな暑いものなのか……。まるで真夏……。いや、それ以上の灼熱地獄と言っている。ソンドは後ろの方をのろのろと息を切らせながら歩いている。まあ、この暑さには流石にへばるだろうが……。それに比べてレン又は平然とした様子で先頭を歩いている。もともとこの世界の住人なんだから、この暑さにも慣れていているということか。

「暑いねー、やっぱりあの服の方が良かったよー」

「暑さを凌ぐ以上に大事なことがあると思っただが……」

特に女なら、もう少し自重するべきだと思う。男なら多少は大丈夫だが……。リムはまだ子供だからいいかもしれないが、それでも気をつけるべきだろう。万が一、大きくなっててもこのままだったら相まらずいだろっし……。

「これならパンツ一丁で大丈夫そうだね」

「待て。それだけはやめろ。その歳で大事なものを失ってもいいのか？」

「大事なものってなあに？」

「……………」

具体的に言えるはずもなく、服を脱ごうとするリムを無言で制止する。とにかく止めなければ、まずいことになりそうだ。

「リムよ、どこでも脱ぐのは良くないぞ？　これから大事な時期に

なつていくわけであるし、少し自重するべきじゃと思うがのう」
「むー……」

不満そうに口を尖らせながらもリムは脱ぐのをやめた。何だろう……？ コイツ、もしかして私の言うことよりレイアの言うことの方がよく聞くんだろうか？ そんな気がしてきた。確かに、レイアは私よりも年上だし説得力もあるんだろうか……。

突然レンヌが足を止めた。目の前を見上げると大きな火山が存在していた。空が赤いせい、なかにマグマがあるせい、赤みを帯びた茶色の山……。確かに見る限り、入り口も見えないし、外側にも上へ登るための道は見当たらない。

「本当になさそうだね」

「そうだねー」

「……一応、手分けして何かないか探してみるか」

「それがいいかのう」

「手分けしてって、その……一人ずつ？」

ソンドがおずおずとした様子で尋ねてくる。

「そうだが……何か問題あるのか？」

「大ありだからね！？ 俺、怖いよ……魔物が出て来たら大変じゃないか……。セアルは俺のこと守ってくれないの？」

「いや、だから……そういうのは、男が女に言うセリフじゃないかな！？ 魔物と出くわしたら逃げればいいだけだろう？ 逃げるのが得意なんだから！？」

「うーん……まあ、頑張ってみるよ。魔物と会ったら誰かのとこまで行くよ」

「来るな、とは言わないが……」

手分けして手がかりになるものを探すために火山の周りを歩いた。火山の周囲には木や草などはほとんど生えてなく、形の不揃いな石が転がっているばかりだった。火山に近づいて壁に目を凝らしてみ

る。
「……………」

小さな、鍵穴のようなものが見える。小さな鍵穴が火山全体を覆うように大量に並んでいた。これはもしかして、何かの鍵を持ってくれば開けられるということだろうか？ 私は、バッグから小さな紙を取り出した。《レイフ》と呼ばれる道具で、これをものに対して使うとそれに関連するものの場所を示してくれる便利な道具だ。《レイフ》を火山に当てると、それが光を放つ。光が一直線に伸びてはるか後ろを示している。それに沿って足を進めていった。

すると数本の木に囲まれた広い地に出た。いっそう太陽が暑い日差しを降り注いでいる。

「探し物はこれかしら？」

「リゼオ……………」

その場には、リゼオが立っていてその手に小さな赤色の鍵を持っていた。

「待ってたわ。今日はオーブを返してもらったから。この鍵がある限り逃げたりしないわよね？ 全く、一人になるのを待つのは退屈だったんだから」

ため息をついて、ポケットに鍵をしまつと血桜狩りを構える。
なるほど……私が一人になるのを待っていた……。以前のあれで、ソンドの力を恐れているということだ。私一人なら大丈夫だと……。私もなめられたものだ。けど、もう負けない。

「返り討ちにしてやる」

「でかい口叩くのね？」

無言で水魔刀を抜き放つ。

以前とは違う。ちゃんと空間を開けることだってできた。もうコイツには負けない。

リゼオが血桜狩りを高く掲げると、その周囲に炎が顕現する。思わず目を見開いた。なぜ、空間を開けていないのに？ だが、すぐに気づいた。ここは炎の世界。炎使いであるリゼオはこの世界にいる今、わざわざ空間を開ける必要はない。炎の世界にいるならば、直接炎を呼び寄せることができる。

「ほら、どうするの？ 今のうちに負けを認めたらどう？」

リゼオは自信ありげに言う。まだ、私が以前と変わらないと思っているんだろう。自分の勝利を信じて疑わない……。そんな雰囲気だ。私はリゼオの期待を裏切り、空間を切り裂いた。傷口の向こうには蒼い世界が展開している。水の世界。

「え……？」

リゼオは信じられないといった表情をしている。それに構わず、傷口に水魔刀を差し入れた。

第1 - 9 記

驚きの表情を浮かべるリゼオに対して、私は傷口から水魔刀を引き抜いた。水魔刀は蒼い水球を纏っている。初めて異世界から呼び寄せることができたが、うまく扱えることができるのか心配だった。

「ふん……アンタが魔法を使えるようになったところで私には勝てないわよ？」

リゼオは、そう言い放つと血桜狩りを大きく振るう。赤い炎の風が地面を切り裂き、砂が舞い上がる。そのままこちらに直進……炎を防ぐべく水魔刀を縦に振り下ろした。目の前に水の壁が作られ、炎の風を消し去った。

どうやら思ったよりも魔法の扱いは難しくないらしい。呪文などややこしいものは必要なく、直感で分かる。リゼオの攻撃を防いだ後、こちらから反撃に出る。

水球を纏う水魔刀を持って疾走　リゼオを一閃する。

「……っ！　この、落ちこぼれのくせに！」

リゼオは、攻撃を受けても体勢を持ち直す。その身体からは血が流れ出ている。普通の村人なんかなら、既に地面に転がっているレベルだろう……あるいは、死んでいてもおかしくないレベル。だが、魔人は人間に比べて耐久性が極めて高い。あれだけのダメージでも動くことが可能。

血桜狩りを振り上げるリゼオ。赤い軌跡が描かれる。

炎の竜が顕現し、こちらに襲いかかってくる。竜の長い身体が周囲をぐるりと囲む。逃げ場がない状態……。竜が肩に噛み付いてくる。相手はただの竜ではなく炎の竜……痛みと焼け付くような暑さ

を感じた。

「くっ……」

かろうじて動かすことができる左腕に水魔刀を持ち替え、竜の脳天に突き立てた。竜は炎の風となって空中へと消えていく。

よく考えれば、こちらの方が有利だ。リゼオの魔法は炎で私は水。水は炎を消すことができる。大抵の炎は打ち消すことが可能なはずだ。その証拠にリゼオは焦っていた。

「何で、あんたみたいなの……！」

怒りのこもった声を漏らす。先程の攻撃のダメージでよろめいている。

私は、確信した。勝てる。

自信過剰とかそういうものではなく、本気で勝てる。

再び勢い良くリゼオに向かって水魔刀を振り下ろす。

「……っ！」

リゼオは血桜狩りから炎を発しながら受身の態勢を取る。恐らく防御シールドだろう……炎は主を守るために襲いかかってくる。

「っ……」

炎の暑さに思わず顔をしかめる。

一旦引くべきだとも思ったが、ここで引いてはいけない気がしてそのまま力を込め、水魔刀を振り下ろす。水球が弾け、水が溢れ刀で傷付いたリゼオを飲み込む。

ようやく水から抜け出したリゼオは地面に這いつくばってこちら

を見上げる。

その表情は今まで見たこともない　恐怖を感じていると容易く分かるようなものだった。

トドメを刺すため、リゼオに近づいた。

「やめなさいよ……ほら、もうアンタのこと殺そうとしないしオーブだって奪おうとしないから……」

「……お前は、いつも言ってたじゃないか」
「……？」

「魔王は情けをかけない」
「……っ！」

水魔刀を振り上げる。

リゼオにトドメを刺すために……。

「やめっ……」

振り下ろす　はずだった。

「セアル！」

「なっ……!!?」

背後から抑えられ、水魔刀を落とした。振り向くと、そこにはソンドがいた。

「殺しちゃダメだよ。ほら、その子ももう殺そうとしたりしないって言ってるじゃないか」

「バカか。そんなの嘘に決まってる。こんな奴の言うことなんかっ……!!」

「俺は信じるよ」

そう言い、ソンドは微笑む。

その言葉に驚いたのは私だけではなくリゼオもだ。

「俺は信じる。きっとその子はもうしないよ」

「……………」

リゼオは何か言いたそうだったが、結局何も言うことなくよろよろと立ち上がり、姿を消した。

「ほら、セアルも疲れたよね？ 少し休もう」

「……………とりあえず放せ」

「え？」

「その……………どさくさに紛れてどこ触ってるんだ!？」

「え？ ああ、そうだったんだ……………。気づかなかつたよ」

苦笑しながらソンドが離れる。

「まあ、休もうよ。鍵も手に入つたみたいだし」

いつの間にか、ソンドは鍵を手握っていた。リゼオが落とすたのを拾ったんだろうか？

第1 - 10記

リゼオが去って、とりあえず近くにあった洞窟で休むことになった。

薄暗い洞窟は暑い日差しを遮ってくれるのがありがたい。

「ほら、座って座って」

ソンドに促され、座るがごつごつした地面なので座り心地がよいとは言えない。

「えーと……包帯包帯」

言いながらバッグのなかを手探りし始めるソンドを制止する。

「待て。包帯ってお前が巻くのか？」

「ダメ？」

「ダメに決まってるだろ！？ 私はこれでも女なわけで……」

「セアルはサラシ巻いてたし大丈夫だよ。大事なところは隠せてるわけだし。だから、胸とかちゃんと隠せていれば一緒にお風呂にも入れるわけ」

「殴っていいか？」

なぜか話が別の方向に進んでいる。いや、一緒に風呂入るとか無理だろう。兄弟ならまだしも……。正直何考えてるのかよく分からない。

「殴る！？ それはダメだって……いじめないで……」

「……と言うか、私は一緒に風呂なんか入らないから」

「さて、包帯巻こうね。いい子だから」

「話逸らしたと見ていいのか？」

「じゃあ、服脱いで！。何も恐くないよ？ セクハラなんかしないし、お嫁にいけなくなるようなこともしないからね」

「……わざわざしないって言う奴の方が怪しまれるのは知ってるか？」

「知らなかったよ……」

「もういいから、レイアを呼んで来い。回復魔法でいい」
「……………」

何かを訴えかけるような目でこちらを見るソンド。いや、そんな目で見てもダメなものはダメだからな？

「早く呼んで来いバカ」

「セアルは俺の気持ちを弄ぶんだね……」

「じゃあ……お前の気持ちを正直に言ってみろ」

「え？ 言えないよ。あんな恥ずかしいこと……」

「……言えないようなことなら尚更ダメだ。早く呼んで来いって何
回言えば分かるんだ！？ お前の耳は何だ？ 飾りか何かなのか？」

「高性能な耳、かな」

「その割には私の言葉が理解できてないようだが……」

「高性能に言葉を正しく分析……。さっきのレイアを呼んで来いは
照れ隠しで……。正しくは、早く脱がしてくれ、かな」

「黙れ。誰がそんなこと言つか！ リムじゃあるまいし……」

リムならあり得なくもない。平気で裸になろうとするぐらいだ。
あれなら……いや、今重要なのはそんなことではなくて……。

「早く呼んで来いって……いや、もう自分で探しに行く」

なんと言つか、いつまでたっても呼びに行ってくれない気がする。
立ち上がるとソンドが慌ててしがみついてくる。

「ダメだよ。怪我してるんだから……」

「だったら早く呼んで来いっ！」

ようやくソンドが呼んで来たレイアに傷を治してもらった。

「で、鍵は手に入ったわけじゃな？」

「だね！」

「うん、ここに」

ソンドがポケットから赤い鍵を取り出した。

「でも、鍵穴大量だったよね。どこに……」

「いや、恐らくどこに刺しても大丈夫でしょう」

口を開いたのはレンヌだった。

レンヌの方へ顔を向け、質問を投げかける。

「それは……なぜ？」

「多分あの大量の鍵穴は、鍵が存在することを示すヒント。一箇所
だけでは鍵穴が見つかる確立が非常に低い。だから、ああも大量に
あったんです。紅神鳥は慈悲深く人々に手がかりを残すという噂が
あります。恐らく大量の鍵穴は紅神鳥の仕業でしょう」
「なるほど……」

まあ、番人というのは何も悪い魔物ではないんだろう。源を守る

ために戦う魔物だ。

「じゃあ、行くか……」
「だね」

洞窟から出ると、火山に近づいた。

火山のなかは相当暑いんだろうな……。今でも十分暑いって言うのに……。

そう思いながらも適当な鍵穴に鍵を刺す。

地面が大きく揺れ、大きな音をたてながらゆっくりと火山に大きな穴が出現する。

「暑そうだね。気をつけてね」

苦笑いしながらそう言い、手を振るソンドの胸ぐらを掴む。

「お前も行くんだろ」

「そうだね……セアルのこと好きにしていって言うなら」

「その条件は呑めないが来い」

「ソンドー、このなかには魔物さんがたくさんいて楽しいよ!」

「俺は恐怖でいっぱいだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2570x/>

ヘタレ勇者と意地っ張り魔王ちゃんで大魔王を叩き潰せ！！

2011年10月19日07時09分発行